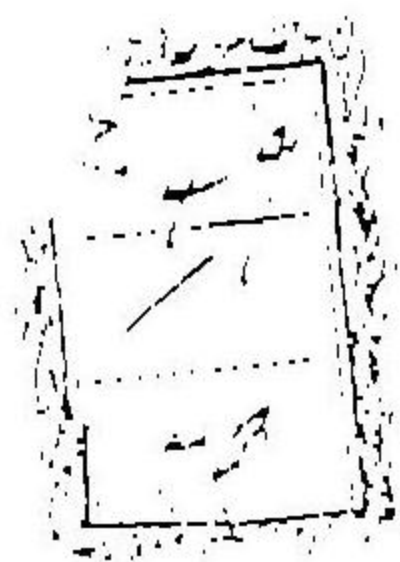


2189



松井直誠著

勸解論綱

明治十三年七月

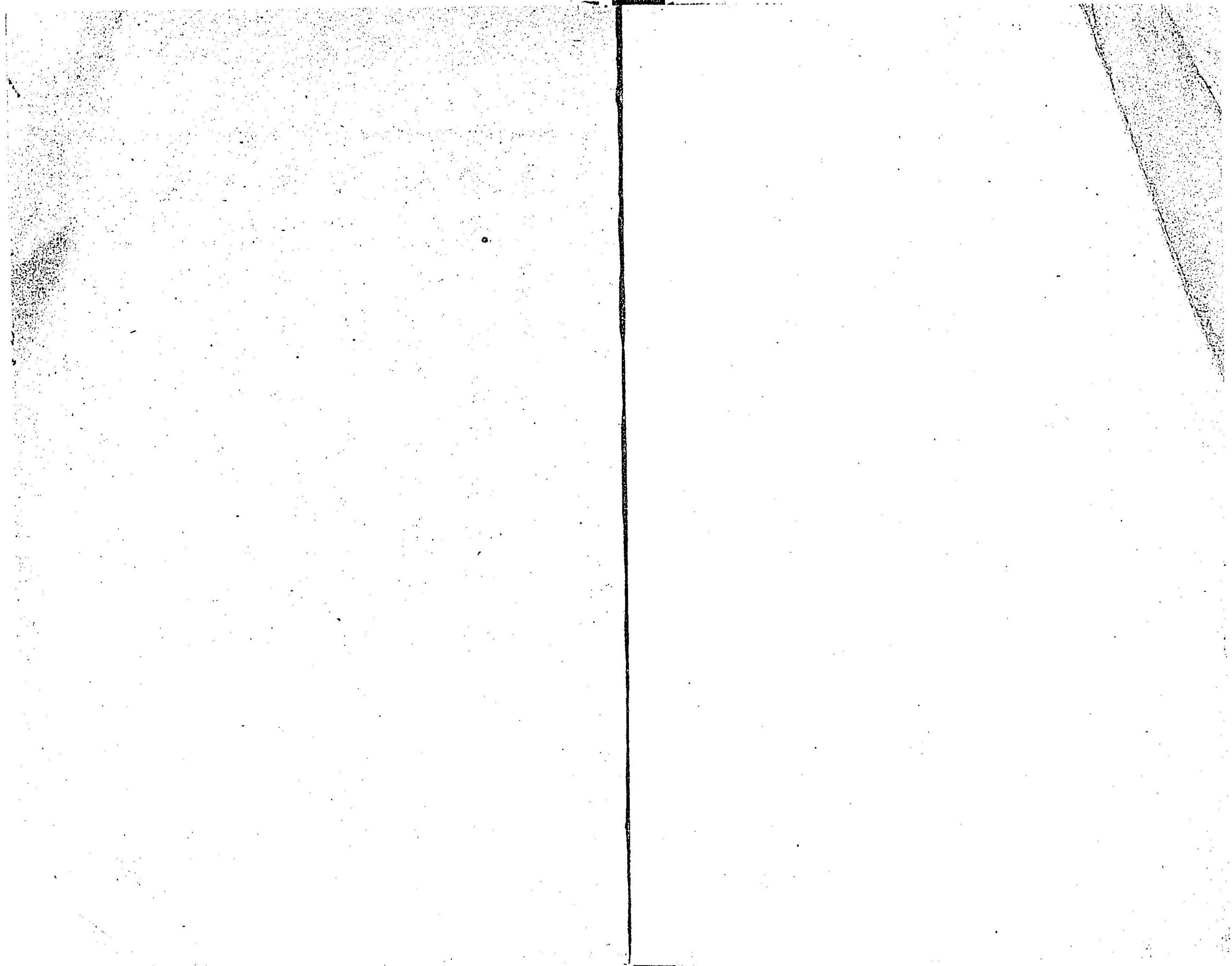
東京圖書館

新門三曲

部一

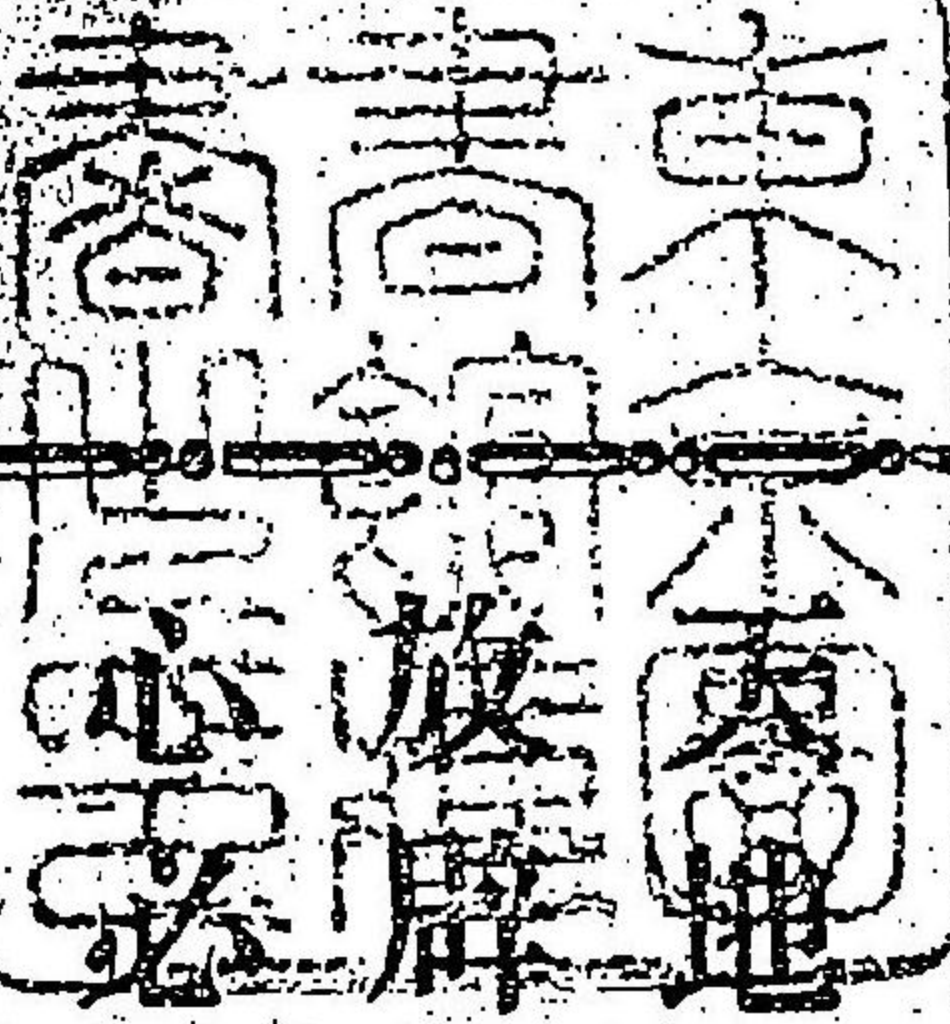
架一

號



勸解論綱序

施諸己而不願亦勿施於人則謂以
 愛己之心愛人之性也人誰無愛己
 之心哉蓋人非為然矣禽獸之類昆
 蟲之族苟賴呼吸大氣之力聊生乎
 天地之間者皆然焉故無愛己之心
 邪侈無不為而已善推愛己之
 心必
 胚胎愛人之心矣。溯而稽元始



亞當實爲人類之父母矣。今也分雖
居五洲實則兄弟也。況於生而同世
同國同志者則莫非爲眞兄弟。故曰
愛人之心愛己之心也。愛己之心愛
人之心也。世降而人情如毛利走疾
氣車於輸物。譏傳速電氣於通信。倘
有所不怵己之心思若撻之於市朝
漫以訟人爲常。慣恒例於戲失愛人

愛己之心。大拂人之性。災不知逮夫
身。蓋又危哉矣。我著此論得助爭者
於萬一。聊可謂洽忠恕之道乎。

明治十二年庚辰六月下院書于岡崎

村莊耕讀樓上、山城松井直誠

此書は、松井直誠著の「勸解論綱」の第壹編「勸解法の起源」に関する内容である。右の欄には、この論の要旨が簡潔に記述されている。この論は、私権の自由たることを論じ、国家の権力は、個人の自由を侵害するものではないことを示している。また、国家の権力は、個人の自由を保護するために必要であることも示している。この論は、現代の憲法思想の基礎を築いた重要な著作である。

松井直誠著 勸解論綱

○第壹編 勸解法の起源

蓋勸解法ヲ論セント欲スレハ最初ニ私權事ノ自由ナル
理ヲ詳ニセサレハ得テ勸解ノ旨趣ヲ識得スル能ハス嘗
テ恐ル勸解法ヲ施用スルハ是猶公權刑ト等シク國家ノ
全然掌ル事務ト相混センコトヲ凡ソ人ノ生ルヤ僉ナ不
羈自由ノ性アルコトハ猶國ニ元氣活動アルカ如シ苟クモ
人ノ身體ニ自由ノ權ナクンハ則チ國ニ元氣ト謂ハサル
ヲ得ン而シテ此自由ノ權ハ天神直ニ人ノ靈魂ニ賦與ス
ルモノニシテ法學ノ開明ニ由テ得タルモノニ非ラス唯

天稟固有ノ權利ナレハナリ是故ニ私人ナルモノハ國家
 ノ力ヲ借テ始テ私人トナルモノニ非ラス私人ハ素ヨリ
 私人ナリ故ニ其權利ニ至テモ亦國家ノ力ヲ借テ始テ立
 ツモノニ非ラス則天稟固有スル所ノ權利ナリ唯私人ノ
 權利ハ國家ノ力ト其保護トニ因テ始メテ全備固確スル
 一ヲ得シノミ然リ而シテ其保護ナルモノハ千耀萬輝名
 狀ニ違アラスト雖モ私人ノ權利ト財產トニ至テハ直接
 ニ司法權ト警保權トノ反照ヲ受クル一常ニ夥多ナリト
 ス故ニ其權利財產ニ傷害ヲ加フル者アレハ微賤ノ人民
 及ヒ内國ニ潦留スル外國人其他何人ニ論ナク直ニ法官

ノ裁判或ハ警察官ノ保護ヲ求メ以テ其權利財產ヲ回復
 保全スルノ權利アレハ法官警察官吏モ亦之レヲ維持セ
 シムルノ義務「シテブリカ」アルハ論ヲ俟タサルナリ若シ其
 財產權ノ追回ヲ求ムレハ其費用得ル處却テ失フ所ヲ償
 フニ足ラストシテ抛擲ハクサイセント欲スルモ素ヨリ自由ノ權
 ニ在テ敢テ障礙サマハトナルノ恐ナシ然レモ自己ノ權利ヲ失
 墜スレハ猶天神ヨリ授托スル所ノ權利ヲ失墜スルニ異
 ナラス故ニ人誰カ權利財產ニ傷害ヲ受ケテ默可スルノ
 理アラシ哉凡法官ノ本務ニ於ル遘モシハラ國家ノ法制秩序
 ヲ遵守シ法律ノ尊嚴ナル所ヲ顯スカ故ニ之ヲ簡約シテ

謂ハ、國家正義公直ノ旨ヲ保全スルモノニシテ彼ノ便
 利ヲ謀リ有用ヲ濟スカ如キ職掌ニアラサレハ已ムヲ得
 サルノ事情及屢々變易スル衆論等ニ着眼スルヲナク現
 ニ確定スル法律ヲ規矩トシテ一向之ヲ遵奉スルニアラ
 サレハ決シテ能ク其職ヲ尽スト云フ可ラス又法官タル
 者ハ自己ノ椅前ニ出ル者ヲ貧富強弱ニ由テ愛憎好惡ス
 ルヲナク偏ニ公明正大ノ心ヲ以テ其曲直邪正ヲ釐竅シ
 原告人ハ宜シク如此ス可シ被告人ハ宜シク如此ス可シ
 ト裁判スルヲ要スルノミ、ソウウエルズメン 縱令政府ノ權ト雖モ敢テ喙ヲ
 容ルヲ能ハサルナリ然リ而シテ其規矩トスル所ハ專ハ

ラ人定法ニ在リト雖モ其法律ノ不備法律ノ不委法律ノ
 所欽アル時ニ於テハ乃チ天然法カケル〔法第五百六十五條（上畧）主ニ因テ
從テ併スノ權ハ全ク天然公
 平ノ道ニ順フ可シトアリ〕及ヒ習慣法同上第五百九拾條（上畧）所有者ノ定メ
 條ニ衆庶ノ熟知スル習慣ニ因リ云々又第一千七百六十二條（上畧）其
 他ノ習慣ニ定メタル期限云々トアレハ之ヲ引証トス〕等ニ由テ判
 定スルモノナレハ縱令機敏ノ才力ヲ具ヘタルカ又ハ人
 間万類ノ撮要録ト呼ハル、法官ト雖モ必ス過チナシト
 謂フ可カラス況ンヤ尋常一樣ノ人タレハ或ハ情實實際
 ニ適應セサルヲナキニシモアラス甚シキニ至テハ判文
 法律ハ、ドロノ言辭ヲ用ヒ巧ニ論辨スルヲアツテ必竟法學

ナ修業スルモノハ會得スルモ其原被ニ至テハ判定ノ由
 テ出ル所以ノ理ヲ知ラス恰カモ法官ト代言人ト學問上
 ニ係レルコトノ如クシテ兩造ハ實ニ空ク費用ヲ擔當スル
 ニ過キサルカ如シ之ニ因テ是ヲ視レハ法官タルモノハ決
 シテ勸解ノ處置ヲ施用セサルコト又明ケシ若シ之ニ反シ
 テ法官勸解ヲ施サント欲スレハ遂ニ原被法官ノ本務ニ
 悖リ其正義公直ノ旨ヲ守ルヤ否ヤヲ疑フニ至ル可シ瑞
 士「ブルンチユリ氏」私判ノ法ヲ論セリ曰ク私判ノ法トハ
 案ヨリ裁判所ニ告訴セス原被双方互ニ相議シテ俱ニ一
 人ヲ撰ヒ以テ其判定ヲ囑托スルモノナリ而シテ此私判

ノ法ヲ用ユルハ元來人民ノ自由ニシテ決シテ他ニ妨ケ
 アルモノニ非ラス何トナラハ國家ナル者ハ私人ノ際ニ
 生スル爭論ノ判定ヲ好テ爲ス可キ理ハ古今未タ曾テア
 ラサレハナリ若双方ノ間ニ生シタル爭論國家ノ判定ヲ
 俟タスシテ私ニ止息スルコトアレハ却テ國家ノ爲メ大ヒ
 ニ利スル所アレハナリト宜ナル哉而シテ此私判ノ法ト
 同シキモノハ勸解法是ナリ蓋未タ審理ヲ爲サレル前ニ
 方リ先ツ原告被告ノ中間ニ立入り法律ニ因テ審判スル
 ニ非ラスシテ唯專ハラ和解スルヲ掌ルノミ而シテ此勸
 解ノ式ヲ以テ訴訟ヲ預防スルノ方法ハ曩キニ荷蘭陀ニ

始リ佛國ニ於テハ道學家ノ賞賛ニ因リ終ニ建法議院「ア
サンブローコンヌ
チチユアント」ノ取ル所ト爲ツテ千七百九十年第八月廿
四日ノ法律ヲ以テ治安裁判所「ドペー」ヲ設ケ治安裁判
官一人及ヒ其ノ補官二人ヲシテ之ヲ統理セシメ總テ訴
訟ノ治安ス可ク勸解ス可キ事件ヲ司ラシメタリ其後補
官ヲ廢シテ治安裁判官一人其書記官ト共ニ之ヲ掌ラシ
ム則佛國訴訟法中勸解式アリ今猶現ニ實踐セリ其後瑞
士日耳曼葡萄牙等ニ於テモ前文臚述シタル如キ法官ノ
勸解ヲ施スハ獨リ益ナキノミナラス却テ人民ノ疑團ヲ
醸スルニ由リ佛國ニ模倣シ特ニ勸解法士ナル者ヲ設置

シテ耑ハラ勸解ニ從事セシムト凡佛國ニ於テ法律ノ職
ニ就カント欲スル者ハ三年間以上大學校ニ入り學課ヲ
卒業シ「ドクトル」リサシエー法律ノ階級ヲ經サレハ
其職ニ就クニ能ハサルナリ然レニ公証人ノテ治安裁判
官商法裁判官クレフェー長等ハ法律ノ職ニ預カル可キ
モノナレニ必スシモ「ドクトル」リサシエーノ階級ニ
上リタルモノニ非ラサレハ能ハスト云フコトナシ之ニ懸
テ是ヲ觀レハ瑞士日耳曼葡萄牙ノ如キ特別法士ナルモ
ノハ猶佛國ノ治安裁判官ト同キモノナル可シ必竟法律
ノ職ニ在ルモ其階級ヲ經サルモノナリ既ニ民法第二千

二百四十五條ニ占有者「ノボツロツ」勸解ノ爲メ治安裁判所ニ呼出テ受ケ其後法律上ニ定タル期限内ニ呼出テ受ケタル時云々トアルニ依レハ必竟治安裁判官ヲ唯一箇ノ勸解者ト看做シ裁判官ト同視セサルモノ、如ク然リ我日本ニ於ハ未タ階級モナク又勸解ヲ掌ルモノハ皆純粹ナル法官ノ手ニ在レハ其得失如何ソヤ曾テ勞カニ思ラク此職任ヲシテ各宗ノ教導職ニ擔當セシムレハ却テ國家ノ爲メニ大ヒニ利スル所アル可シト然レ本論ハ今日實地行ハル、處ニ付テ其得失ヲ論究セント欲スルニ因リ其教導職ニ勸解ヲ托スルヲ述フルハ頗ル贅沍ニ似

ダリト雖^レ猶他日論弁ノ前車ト爲シ略言セン蓋今日勸解ヲ掌ルモノハ專ラ法官ノ職任ト爲リタレ^レ或ハ恐ル正義公直ノ旨ヲ傷ナハンコト古昔羅馬ニ於テハ法律學全ク僧徒ノ手ニ在リシト將タ法律ハ元來教法ノ一部ニシテ其關係モ亦自ラ尠ナカラス民法第千三百五十七條以下誓セルメンノコトアリ誓トハ結約人ノ一方ノ神ヲ證人トシテ其己レノ證スル所ノモノ、誠實ナルコトヲ述ルヲ云フ曾テ知人佛國人教法家ビリオン氏ト語り偶談誓カマクノコトニ及フ謂ヘラク元來法律ハ教法ノモノニシテ此誓ノ條ニ至テハ全ク教法ノ取扱タリト故ニ法官ノ「デタリユ」細目糸規

調ラガル學ニ勾ニ泥シ兩造ノ情實ニ抵悟脊馳シタル勸解ヲ
 派ナ云フニ施スヨリ教導職ヲシテ所謂天人万事ヲ包含スル淵言ニ
 基キ勸解ヲ施セハ豈大ナル功績アラサラン哉蓋宗教自
 由ノ一ハ衆庶ノ熟知スル處ナレモ基督宗教ニ至テハ我
 邦未タ之ヲ明許セス唯默許ノ間ニ在レハ暫ク之ヲ闕キ
 彼ノ欽明ノ朝十三年百濟ヨリ佛像及ヒ經論ヲ獻シ聖德
 太子之ヲ尊奉スルニ始リ八宗〔華嚴三論法相律天台〕別レテ天
 台宗〔山門派〕真言宗〔古義〕淨土宗〔鎮西派〕禪宗〔臨濟曹洞〕淨土真宗
 西派東派佛派高田派木〔一致派勝劣派〕時宗〔十二派〕トナリ各獨
 立ヲナシ其傳教ノ天台ニ於ル弘法ノ真言ニ於ル榮西ノ

臨濟ニ於ル道元ノ曹洞ニ於ル圓光ノ淨土ニ於ル見眞ノ
 眞宗ニ於ル日蓮ノ日蓮ニ於ル遊行ノ時宗ニ於ル各卓見
 ナテ派ヲ開キ遂ニ今日ノ旺盛ヲ致セリ然モ其源流ニ
 遡レハ悉ク皆ナ釋教ヨリ派流シタルモノニアラサルハ
 莫シ是故ニ各宗ノ教導職ヲメ此勸解ノ處置ヲ掌ラシメ
 ハ現世ノ利益及ヒ因果應報ノ道ヲ懇説シ法律ノ所謂内
 義務〔性法上ノ〕外義務〔法律上ノ〕ナルモノヲ併施スレハ一ハ原
 被ノ爭論ヲ和解セシムレハ勸善懲惡ノ道ヲ悟ラシムル
 ニ足ル則之レ一舉シテ兩全ノ策ト謂フ可シ我レ明治十
 年及十一年全國勸解件數ヲ聞クニ大略左ノ如シ

明治十年新訴

六十五万八千九百件

勸解ニ依テ和解セシモノ 四十四万件余

和熟セサルモノ 四分ノ一余

願下ケシタルモノ 十七万千何百件

明治十一年新訴

七十一万二千余件

勸解由テ和熟セシモノ 五十八万〇八百件

和熟セサルモノ 六万三千何百件

願下ケシタルモノ 二十一万余

如右

之ニ繇テ是ヲ觀レハ年ニ勸解ノ増々盛ナルヲ知ル可キ
ノミ豈他アラシ道義心ノ薄キヨリ此争訟ヲ醸スレハナ
リ古ニ曰地ヲ畫シテ獄ト爲セハ人誰カ之ヲ蹈ム者アラ
シ縱令事ノ是非曲直ハ閣キ法庭ニ臨メハ是レ道義上名
譽ヲ毀損シタルモノナリ豈恐レサル可ケンヤ是故ニ教
導職ヲシテ此責任ヲ掌ラシメハ法庭ニ臨ミ名譽ヲ欠ク
ノ虞ナク且某ノ宗旨ノモノハ常ニ争ヒ多クシテ其宗旨
ノモノノ争ヒ少キヲ見ルニ足リ修ニ人々皆名譽ノ重ヲ
悟リ良善ノ風俗ニ化シ争者ハ畔ヲ讓ルニ至ル可シ茲ニ
於テ全國勸解ノ年ニ減シテ訴ヘナキノ日ヲ見ヘシ然リ

而シテ勸解ヲ約シテ言ハハ必竟義務者ト爲ル可キ者ノ
 利益ニシテ權利者ト爲ル可キ者ノ損害ト謂フ可シ何ト
 ナラハ義務者ト爲ル可キ者ハ訴訟入費ヲ拂ハサルヲ以
 テ權利者ト爲ル可キ者ノ損失ナレハナリ故ニ教導職ノ
 言ヲ服膺セス勸解和熟セサルキハ義務者ト爲ル可キ者
 自カラ招グ損失ニシテ猶靈魂ノ祥福ヲ願ハサルモノト
 一同ニシテ強テ之ヲ爲サシメント欲スレハ彼ノ古昔基
 督教ヲ傳播セント欲シテ兵ヲ用ヒ火ヲ放テ之ニ逼リ強
 ヒテ此教ニ從ハシムルノ暴戾慘刻ナル所業ヲ爲スノ外
 道ナキナリ故ニ勸解ヲ經テ別ニ訟訴ノ道アリ必スシモ

勸解ニ於テ強求切迫スルコトナシ而シテ「ブルンチユリ氏」
 ハ勸解ヲ掌ルモノハ民間ニ在テ能ク人情世態ニ老練シ
 一般ノ信仰ヲ受ケ而シテ自ラ眞ノ官吏タルヲ欲セス
 唯好テ勸解等ノコトヲ自任スル徒ニ此職掌ヲ托スレハ大
 ナル功績アル可シト云ヘリ然ラハ國家ノ判定ヲ俟タス
 シテ其財産權利ヲ保持スルコトヲ得可キナリ若シ勸解ニ
 由テ幸ヒ双方和熟相整フコトアルキハ其功績或ハ廣博ナ
 ル學識ヲ以テ施セル審理ノ功績ト全ク相吻合セサルコ
 ナキニシモアラサレモ然レモ互相ノ權利ヲ回復シ裁判
 ノ費用ヲ要セサルノ益アルノミナラス決シテ人民ノ權

利ヲ害スル不條理ノ處分トナルノ恐レアラズ諺ニ瘡痍セキソツナル勸解ハ肥大ナル審理判定ニ優レリ又醜惡ナル和睦モ善美ナル訴訟ニ勝レルト若シ勸解ニ服從セスシテ双方眞ノ審理判定ヲ受ルキハ喩ヘハ兵刀ヲ接セサル戰爭ニ異ナラスシテ其訴訟ニ必要ナル証據書類ハ則銃砲彈藥ノ効用ヲ爲シ裁判費用ハ則輜重兵糧ノ効用ヲ爲スカ如クシテ兩造頗ル苦慮ヲ生スルコト形狀ス可カラス而シテ忿懣フンマン積重セキジュウシ互ヒニ睚眦サイサイ不快ノ情ヲ狹ミ畢世相敵視シ人間ノ交義ヲ破壞スルノ弊害ヲ生スルコトナキ能ハス甚シキニ至テハ葛藤數年ヲ閱シ遂ニハ原告被告相抗拒拒ス

ルノ氣力倦怠カンダイヒロツ老シテ其爭論ヲ拋棄トウキセシムルコトアリ之ノ如キハ必竟互相ノ倦怠ニ因テ其爭ヲ擲却スル者ニシテ必ス他日再燃ス可スコト亦明ナリ是則眞ノ和熟トハナス可カラズ當路者能ク茲ニ注意セサル可ケシヤ抑我國勸解法ノ萌芽ハツガヲ抽キンスルハ纔カニ明治九年九月ニ始テ規程ヲ置カレタリ其第六條ニ凡民事ニ係ルモノハ金額ノ多少專ノ輕重ニ拘ハラズ詞訟人ノ情願ニ任セ之ヲ勸解ス可シ第七條勸解ヲ乞フ者ハ訴狀ヲ作ルニ及ハス直ニ該廳ニ願出テ其事由ヲ陳述スルヲ得セシムヘシ第八條勸解ハ双方トモ必ス本人自カラ出頭セシム可シ但

疾病事故等ニテ已ムヲ得サル時ハ其代人トシテ親戚又ハ定リタル雇人ヲ出サシムヘシ」第九條勸解ハ必スシモ定規ニ拘ラサル者トス但勸解ト雖モ其不參若クハ遲參ニ係ル者ハ其裁判所ノ成規ニ據リ處分スヘシ」又明治九年十一月ヲ以テ民事ノ詞訟ハ可成丈一應區裁判所ノ勸解ヲ乞フ可クトアリ」

如之僅ニ二三ノ定規ニシテ未タ完全ノ法制之レナキニ因リ其實際行ハル、處大ニ似テ非ナルモノナキ能ハス請フ參照ノ爲メ佛國訴訟法勸解ノ式ヲ割^{サツ}記^キシ而シテ後ニ區域ヲ立テ細論ス

佛國訴訟法第四十八條和解民法第二千四十四條見合ヲ爲スノ權利ア

ル者和解ヲ爲スヲ得可キ事柄ニ付主タル訴訟ヲ初メテ爲サントスルニハ原告人豫メ被告人ヲ治安裁判所ニ勸解ノ爲メ呼出シ又ハ双方ノ者互ニ勸解ノ爲メ自己ノ隨意ヲ以テ治安裁判所へ出席シタル後ニ非サレハ初告裁判所ニ於テ其訴訟ヲ爲スヲ聽サス
〔按スルニ和解ヲ爲スノ權利アル者和解ヲ爲スヲ得可キ事柄トハ概シテ何ノ事柄ニ付テモ和解ヲ爲スルヲ得可シ然レモ他人ノ委託ヲ受ケテ財產ヲ所持スル者又ハ幼者治産ノ禁ヲ受ケタル者ノ後見人又

ハ邑及公署ノ管理人等ノ如キハ和解ヲ爲スノ權利
 ナキモノナリ故ニ他人ノ委託ヲ受ケシモノハ裁判
 所ノ許可其後見人ハ民法第四百六十七條ノ如ク親
 屬會議ノ許可法學士三名ノ意見及ヒ裁判所ノ允可
 其管理人ハ國君ノ允許ヲ得ルニ非ラサレハ渾テ和
 解ヲ爲スヲ得ス又民法第三百七條夫婦居ヲ分ツ事
 ハ夫婦双方ノ承諾ノミヲ以テ爲ス可カラストアル
 カ如シ又主タル訴訟ヲ初メテ爲サントスルニハ云
 々主タルトハ第一初メテ爲スノ訴訟タル意ナリ何
 トナレハ初メテ爲スノ訴訟ハ必ス主タル訴訟ナレ

ハナリ故ニ此主タルノ字ヲ刪ルモ可ニ似タリ和解
 ノ本條〔十四千四〕ニ在ルカ如ク和解ノ證據トシテ必ス
 書面ヲ作ルヲ命ストハ先左ノ如キモノナルヘシ
 訴訟ヲ私和スル証書ノ文例

何地居住何職甲太何地居住何職乙次ハ共ニ左ノ事
 ヲ承認ス

一甲太ハ乙次ニ對シ何地ニアル不動産ノ取戻ノ訴
 ナサントス然ルニ乙次ハ此不動産ハ丙三ヨリ
 購求セシモノナルニ依テ已レノ所有物ナルヲ
 主張ス

一 甲太ハ亦此不動産ハ何某ノ遺物相續ニ依テ已レ
 ノ所得セシモノナルヲ主張ス
 依テ右ノ爭論ヲ止メンカ爲ニ甲太乙次ハ訴訟和解
 ノ名義ヲ以テ相結約スル左ノ如シ
 一 甲太ハ此不動産ニ付有スル一切ノ權利ヲ乙次ノ
 爲メニ拋棄ス
 一 此拋棄ニ付テハ乙次ハ甲太ニ何圓ノ金高ヲ償還
 スルノ義務アリ
 右ノ私和ニ依テ已ニ裁判所ニ差出シタル訴訟件ハ
 全ク消滅ス

右本書二通ヲ作り互ニ徴收ス

年月日

甲 太 印

乙 次 印

第四十九條 左ノ諸件ニ付テハ勸解ノ式ヲ爲スニ及

ハス

第一 官府及ヒ其附属ノ地邑公舎幼者治産ノ禁ヲ
 受ケシ者遺物相續人ノ虧缺シタル財産ノ管財人ニ
 管シタル訴訟

第二 迅速ナルヲ要スル訴訟

第三 主タル訴訟ニ他人ノ管涉セントスル訴 第三百三十九

條以下 又ハ保證ニ付テノ訴訟 第百七十五條以下見合

第四 商業ノ事ニ付テノ訴訟

第五 負債ヲ償ハサルニ付禁錮ヲ受ケシ者自由ヲ得ントスルノ訴訟負債者債主ノ爲メニ己レノ財産ヲ差押ヘラレタルコトヲ免カレントスル訴訟負債者人ヨリ金高ヲ得可キヲ債主ノ爲メニ差留メラレタルコト免カレントスル訴訟土地及ヒ家屋ノ貸賃又ハ年金及ヒ養料ノ拂方ヲ得ントスル訴訟代書師裁判所費用ノ償戻ヲ得ントスル訴訟

第六 二人以上ノ者ニ對シ爲シタル訴訟

但シ其二人以上ノ者同一ノ管係アル時ト雖モ亦

此ノ如シ

第七 書類ノ驗眞ヲ爲スニ付テノ訴訟

本人其代書師使吏等ノ所爲ヲ知ラスト述フル訴訟
裁判役數人ノ管轄相觸ル、時其中ノ一人ニ定ム可
キトニ付キ故障ヲ述ヘ他ノ裁判役ノ裁判ヲ受ク可
キトニ付テノ訴訟裁判役不正ノ裁判ヲ爲シタルニ
因リ損失ヲ受ケタル時其裁判ヲ取消シ其償ヲ得ン
トスルニ付テノ訴訟負債者ニ物件ヲ渡ス可カラサ
ル差留ヲ債主ヨリ受ケタル者ニ對シテ爲ス所ノ訴

訟負債者ニ財産差押ニ付テノ訴訟義務ヲ盡クス爲
 メ物件ヲ提供スルコトニ付テノ訴訟民法第一千二百五十七條見合原告被
 告互ニ其證書ヲ渡シ又ハ示ス可キコトニ付テノ訴訟
 夫婦財産ヲ分ツコトニ付テノ訴訟後見人及ヒ管財人
 ニ付テノ訴訟其他總テ法律ヲ以テ別段ニ指定メタ
 ル訴訟

(第一)ノ場合ハ何レモ和解ヲ爲ス可キ權利アル本
 人タラサレハナリ特リ此ニ記列シタル件々ニ止
 マラス已ニ嫁シタル婦女失踪者ノ財産ヲ假リニ
 占有スル者又ハ分散シタル會社ノ管財人等ノ如

キ不能力者モ之ニ包含ス若シ之等ノ件々モ勸解
 ナ施用セント欲スレハ一般ノ原則ニ悖ルヲ以テ
 ナリ

(第二)迅速ナルコトヲ要スル訴訟ハ實ニ屢々之レアリ
 リ猥ニ緩漫ニ附スレハ大ヒナル弊害ヲ生ス可シ
 例ヘハ第五項ノ如ク負債ヲ償ハサルニ付禁錮ヲ
 受ケシ者自由ヲ得ントスル訴訟并ニ生活入費ニ
 給セントスル所ノ財産入額ノ拂ヲ得ントスル訴
 訟代書師ヨリ裁判所入用ノ償却ヲ求ムルノ訴訟
 等ノ如キハ皆急速ニスルコトヲ要スルモノナリ

〔第四〕商業ニ付テノ訴訟ハ勸解ノ式ヲナスニ及ハサル事ハ獨リ商法裁判所ニ於テノミ之ヲ施用スルニ非ラス一般商業ニ關シタル專柄ニ付テハ皆之ヲ施用セサルナリ商法第六百四十條ニ商法裁判所ノ在ラサル地ニ於テハ民法裁判所ノ裁判役商法裁判所ノ裁判役ノ職務ヲ行ヒ且商法ニ循ヒ商法裁判所ニテ裁判ス可シ同第六百四十一條ニ前條ノ場合ニ於テ民法裁判所ニテ商業ニ管シタル事件ヲ裁判ス可キ時ハ其裁判所ニテ訴訟吟味ノ手續キヲ爲ス方法商法裁判所ニ於ケルト同一

タル可ク且民法裁判所ノ裁判言渡ハ商法裁判所ノ裁判言渡ト同一ノ効アリトスト

〔第五〕是又急速ヲ要スルモノニシテ乃チ第二ノ場合ニ同シキモノナリ

〔第六〕二人以上ニ對スル訴訟ヲシテ縱令勸解ヲ爲スコトヲ得セシムルモ實際ニ於テ和解シ難キモノナレハ獨リ益ナキノミナラス却テ多少ノ日ヲ瀰^{ハタ}リ互ニ利益ヲ欠ケハナリ若シ夫婦ノ如キ之ナ一人ノ想像物ト見做スト雖^モ婦主トナツテ其訴訟ニ關係スルキハ之ヲ一人ト見做スコトヲ得ス故ニ

勸解ノ爲メ呼出ヲナスニ及ハス

〔第七〕官吏等ニ對シテ爲ス所ノ訟訴ニ付テハ實ニ和解ヲ爲スヲ得ス即裁判權ニ關スレハナリ又夫婦財產ヲ分ツ等ハ苟クモ其人ノ分限ニ管スレハ是又和解ヲ爲スヲ得ス其未項ニ總テ法律ヲ別段指定メタル訴訟トハ訴訟法第三百廿條監定人其申立書ヲ裁判所ニ納ムルヲ遲延シ又ハ之ヲ肯セサル時ハ勸解ノ法式ナク三日内ニ呼出ス云々或ハ第三百四十五條及八百五十六條ノ場合ノ如キナリ

第五十條

被告人左件ニ付テハ勸解ノ爲メ次ニ記スル所ノ裁判所ニ呼出ヲ受ク可シ

- 第一 人權及レ物權ノ事ニ付テハ其住所ノ治安裁判役ノ面前ニ呼出サル可シ若シ被告人二人ナル時ハ原告人ノ擇ミテ其中一人ノ住所ノ治安裁判役ノ面前ニ呼出サル可シ
- 第二 商業ノ會社ヲ除クノ外總テ會社ノ事ニ付テハ其會社ノ存續スル時間其會社ヲ設ケタル地ノ治安裁判役ノ面前ニ呼出サル可シ
- 第三 遺物相續ノ事ニ付キ其分派ニ至ル迄ノ間

其相續人等ノ互ニ爲ス訴訟及ヒ分派ノ前死者ノ
 債者ヨリ爲シタル訴訟并ニ分派ノ裁判書渡ノ確
 定ニ至ル迄ノ間遺囑ノ贈遺ヲ行フノ爲メノ訴
 訟ニ付テハ其遺物相續ヲ爲ス可キ地ノ治安裁判
 役ノ面前ニ呼出サル可シ

〔第壹〕「フナール氏」カ謂ヘル如ク凡ソ被告人ハ
 未識ノ治安裁判官ニ於ケルヨリモ猶既識ノ裁判
 官ニ於テ信任スルコト多シト蓋被告人住所外ノ治
 安裁判官ナレハ更ニ一面識ノ交親ナキヲ以テ恩
 感ノ威到セサル所アツテ獨リ勸解ノ要領ヲ失ス

ルノミナラス到底效驗ヲ奏スルコト能ハサルナリ
 故ニ其住所ノ治安裁所官ノ面前ニ喚出サルヲ恰
 モ適當ナリトス又被告人二人ナル時ハ勿論原告
 ノ撰ニ任スト雖モ若シ三人トナル時ハ前條第六
 項ニ依リ勸解ノ式ヲ行フニ及ハス

〔第二三〕項モ亦然リ其地ノ治安裁判官其訴訟ニ付容
 易ク直正ノ事情ヲ審明シ將原被双方ノ爲メ大ヒ
 ニ費用ヲ減省シ且其勸解ヲナス爲メ須要ノ理由
 ナ探究シ易ケレハナリ若シ被告人其裁判所管轄
 地觸ノ旨ヲ申出タル時ハ治安裁判官其訴訟ノ種

類勸解ス可キト考定シタル時ハ其當管違ヒノ
 申述ニ關セス押シテ其勸解ヲ爲ス可キヲ要ス又
 明諾ト默諾トノ別ナク原被双方承諾シタル上ハ
 更ニ裁判所管轄抵觸ノ訴ヘテ述可ヲサルナリ
 第五十一條 被告人勸解ノ爲メ治安裁判所ニ出席ス
 可キ呼出狀ノ送達ヲ受ケタルヨリ出席ヲ爲ス日ニ
 至ル迄三日ヨリ少カラサル猶豫ヲ得可シ

〔訴訟法第五條ニハ呼出ヲ受クル被告人治安裁判
 所ヨリ三「ミリヤメートル」〔我國ノ七里半〕ノ距離
 内ニ在スル時ハ呼出狀ヲ送達シタル日ト裁判所

ニ出席ス可キ日トノ間ニ一日ヨリ少カラサル時
 間ヲ隔ツ可シトアルニ本條ニ依レハ日數三倍ノ
 猶豫ヲ爲シタリキ他ナシ勸解ヲ爲ス「ニ關シタ
 ル諸事件ヲ了知スル」太々緊要ナルヲ以テナリ
 又同第七十三條ニ佛蘭西本國外ニ在ル者呼出ヲ
 受ル時ハ其喚出ヲ受ケタルヨリ裁判所ニ出席ス
 ルニ至ル迄ノ期限例ハ「ユンヌ」島「アルゼリー」
 〔亞非利加洲ニアル〕等ニ在ル者ハ一月ノ時間ノ如
 ク距離ノ遠近ニ准シテ猶被告人ニ期限ヲ増加ス
 ル「ナリ

第五十二條 呼出狀ハ被告人住所ノ治安裁判所ノ使
吏之ヲ送達ス可シ但其呼出狀ニハ勸解ノ目的ヲ簡
略ニ記ス可シ

第五十三條 雙方ノ者ハ勸解ノ爲メ自カラ出席ス可
シ若シ故障アル時ハ名代人ヲ出ス可シ

(抑勸解ヲ施用スルニハ必ス本人ニ非ラサレハ更
ニ其利益アルコトナシ縱令名代人ヲシテ和解上ノ
全權ヲ委任セシムルモ或ハ本人ノ意思ヲ轉換シ
得ルモ量ル可カラス加之如何ナル危殆ノコトヲ生
スルモ知ル可ラサレハナリ故ニ本人至當ノ故障

アル時ノ外ハ名代人ヲ撰擇シ出席セシムルコトヲ
得ス是レニ付更ニ一言セント欲ス凡ソ何事ニ因
ラス事務ヲ處スルニハ必ス本人自カラ扱フニ優
ルコトナシ他人ニ代理ノ權ヲ與フレハ其人ノ懈怠
又ハ不善意ヲ以テ如何ナル災害ヲ起スモ知ル可
カラス我公務ヲ取扱屢之ノ弊害ヲ撥見シ常ニ眉
ヲ蹙メタリ

第五十四條 原告人ハ出席ヲ爲シタル上己レノ要ム
ル所ヲ辨明スルコトヲ得又ハ其要ムル所ヲ更ニ加増
シテ述フルコトヲ得可シ又被告人モ己レノ至當ト思

フ所ヲ述フルヲ得可シ○此事ニ付記ス可キ調書
ニハ勸解ヲ爲スニ付テノ箇條ヲ記シ若シ勸解スル
ヲ能ハサル時ハ其旨ヲ簡略ニ附記ス可シ
雙方ノ者勸解ニ付テノ契約ヲ其調書ニ記入シタル
時ハ私ノ契約書ノカアリトス

〔此第二項ニ私ノ契約書ノカアリト謂フニ付テ或
ル論者ハ是ヲ駁シテ必竟公正証書ノ如キ直チニ
夫レニ依テ執行ス可キ證書ニ加証シ得可加附力
〔ホーレルス、エキ〕ナルニ過キスト云ヘトモ我ハ之レ
ト反對ノ説アリ何トナラハ勸解ニ付テノ契約ト

アレハナリ夫レ契約ハ双方ノ承諾和同ニ由テ成
立ツモノナレハナリ又民法第千三百十七條ニ「公
正ノ証書」「チリトルオ」トハ各地ニ於テ証書ヲ記
ス可キ權アル官吏〔証書人
等ヲ云フ〕必要ナル法式ヲ用ヒ記
シタル証書ヲ云フトアルニ因レハ直チニ執行ス
ルヲ得可キナリ凡ソ公証ヲナス公ケノ官吏ト
ハ公証人勸解、裁判官、邑長、裁判所使吏等ヲ指シテ
云ヘハナリ

第五十五條 一方ヨリ他ノ一方ニ誓ヲ求ムル時ハ裁
判役之ヲ許ス可シ又其求メヲ受ケタル者之ヲ爲ス

ナリ肯セサル時ハ其旨ヲ記ス可シ

〔抑勸解式ナル者ハ素ヨリ決定裁判ニアラスシテ
直チニ其レヲ以テ執行ス可キ者ニ非ラサルニ因
リ縱令一方ノ者確正ノ誓ヲ立スト雖モ民法第千
三百六十一條ノ如ク強チニ非理ト做シ處置スル
コトハ治安裁判官ノ管掌ニ屬セサル可シ但シ其誓
ヲ爲スコトヲ拒ム時其旨ヲ調書ニ記ス可キハ職任
ナレハナリ

第五十六條 一方ノ者出席ヲ爲サレル時ハナラフ
シテ罰金ヲ言渡サレ且既ニ其罰金ヲ拂フタルノ証

ヲ立ル迄ハ裁判所ニテ其者ニ訴訟ヲ爲コトヲ許サス
〔双方ノ者ノ中一方ノ者出席セサル場合ニ於テハ
治安裁判官ハ之ヲ受理スルノ理ナシ故ニ下等裁
判所ニ移シ而シテ其罰金等ノコトモ亦其所ニ於テ
爲スモノニシテ治安裁判官ハ唯呼出狀ノ正副本
ヲ以テ缺席ヲ証スルノミ則次ノ第五十八條ノ如

第五十七條 期滿得免ノ權ヲ得ントスル者勸解ノ爲
メ呼出ヲ受ケ出席ヲ爲サス又ハ出席ヲ爲スト雖モ
勸解ヲ爲スト能ハサル時其日ヨリ一月内ニ訴訟ヲ

受クルニ於テハ期滿得免ノ權ヲ得可キ期限ノ既ニ
經過シタル時間ヲ除棄シ借賃ノ息銀又ハ土地家屋
ノ入額ヲ償フ可キノ義務ヲ生ス可シ

第五拾八條 若シ一方ノ者出席セサル時ハ治安裁判
所ノ書記局ノ簿冊ト呼出狀ノ正本又ハ副本トニ其
旨ヲ記ス可シ但シ其場合ニ於テハ別ニ其事ニ付テ
ノ調書ヲ記スルニ及ハス

前數條ノ如ク佛國ニ於テハ勸解ヲ爲スニ一定ノ方法
アツテ治安裁判官之ヲ掌レリ則訴訟法第四十八條ニ
和解ヲ爲スノ權利アル者和解ヲ爲スヲ得可キ事柄ニ

付テハ勸解ノ式ヲ用ユルト成テ其第四十九條ニハ
勸解ノ式ヲ爲スニ及ハサル條款ヲ掲ゲタリ之ニ由テ
是ヲ視レハ強求切迫必スシモ勸解ニ於テ和熟ヲ爲サ
シムル意ナクシテ所謂公權ト等シク國家ノ全然掌ル
事務ニ非ラサルト亦明白ナリ而シテ明治九年九月第
六十六號ノ達書第九條ニ勸解ハ必スシモ定規ニ拘ハ
ラサル者トストアルノミ抑此條ニ於ル語簡ニシテ意
廣シ若シ之ヲ謬誤セハ確トシテ未タ一定ノ方式ナキ
ニ因リ或ハ訴訟ヲ爲ス者ハ必ス先勸解ヲ經由セシメ
スンハアル可カラスト爲シ到底和解ヲ爲スヲ能ハサ

ルモノト雖モ一應區裁判所ノ勸解ヲ乞ハシムルノ恒
 例トナルニ非ラサルヲ得ン而シテ定規ニ拘ハル者ト
 センカ恰カモ訴訟ヲ成スニ重關ヲ設ケタルカ如シ登
 訴セント欲スル者ハ空シク一層ノ關ヲ過キ而シテ又
 更ニ關ニ入ルニ非ラサレハ訴訟ヲ爲ス可能ハサルカ
 如シ徒ヲニ時日ヲ消耗シ特リ利益ヲ失墮スルノミナ
 ラス久シキニ至テハ兩造倦怠疲勞遂ニ訟ヲ擲棄スル
 モ知ル可カラス然ラハ必竟訴訟人ノ前途ヲ遮絶シ速
 進セシムル可能ハサルカ如シ而シテ定規ニ拘ハラサ
 ル者トセンカ恰カモ紊レタル糸ノ如シ綜理スルニ由

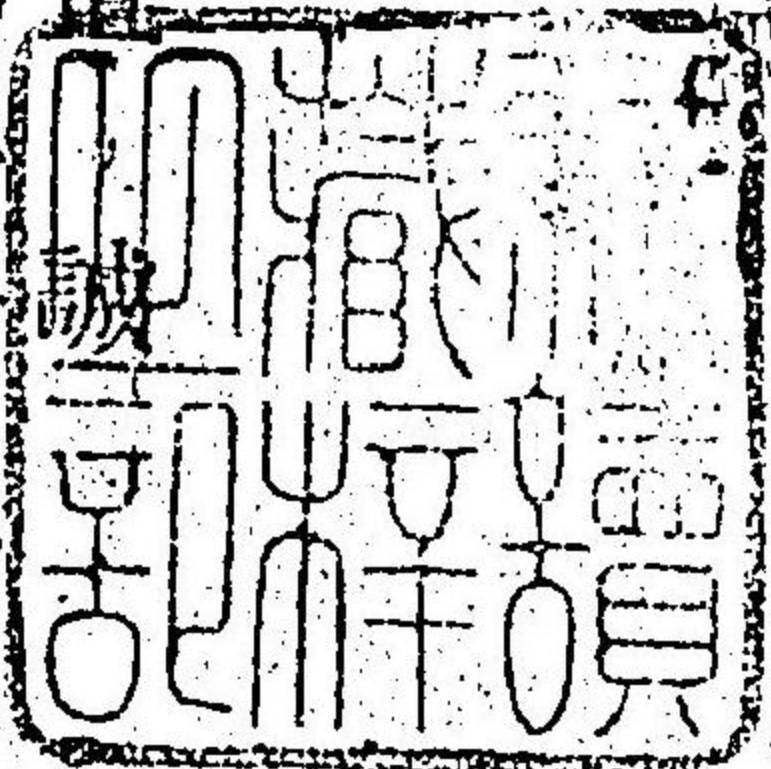
ナカル可シ何トナレハ民人ノ衆キ職分ノ涯リナキ一
 ニモ差違ヲ生スレハ直ニ勸解裁判所ニ提供シ其甚
 シキニ至テハ〔姦通〕法律ニ禁スル所ノ紛争ヲ以テ恬ト
 シテ勸解ヲ請フニ至リ終ヒニ互ヒニ媿態ノ状ヲ露シ
 道義ヲ傷リ開明ノ舟車ヲ歇止スルノ弊ヲ生スルモ未
 タ知ル可カラス故ニ定規ニ拘ハルト拘ハラサルトノ
 區域ハ喩ヘハ二箇ノ相對スルモ巖礁ノ如シ此路ニ當
 ル者ハ宜シク共ニ之ヲ避ケテ其中路ヲ航ス可シ

明治十三年七月九日出版御届
同 年同月 刻 成

定價拾貳錢五厘

著者兼 京郡府平民
出版人 松井直

愛宕郡第二組岡崎村
拾五番地



新京極藥師下ル 太田權七

寺町綾小路下ル 川勝徳治郎

寺町三條上ル町 辻本九兵衛

寺町三條上ル町 細川清助

綾小路柳馬場西入 寺田榮助

佛光寺高倉西入 本城小兵衛

發賣書林

大坂吉岡平助 伏見山田權市

同 長島眞七 大津小川義平

同 辻本定次郎 同 古川伊助

同 小谷卯八郎 同 島林仙次郎

同 柳原喜兵衛 濃州 三浦源助

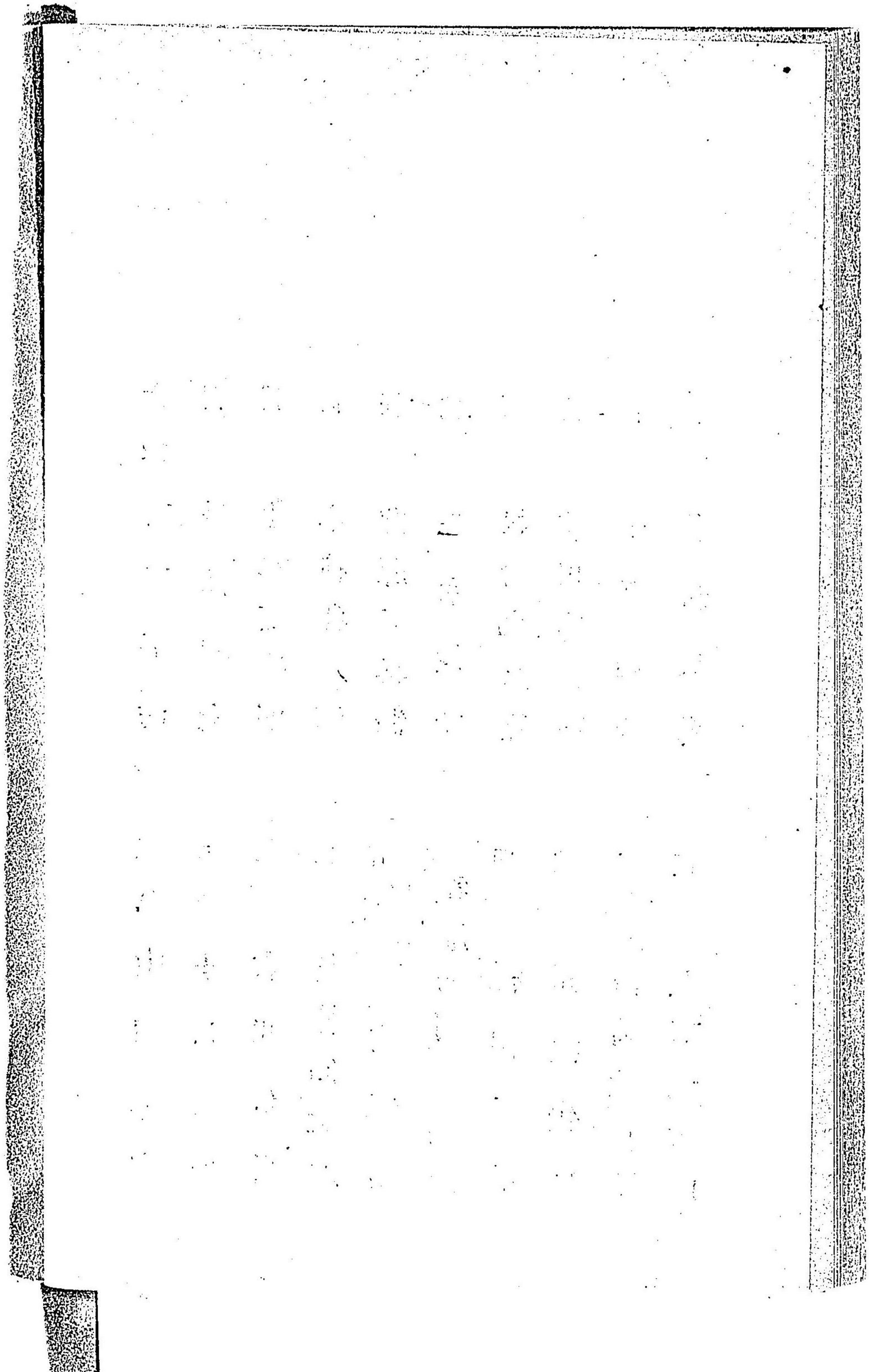
同 三木佐助 尾州 片野東四郎

同 松村九兵衛 同 梶田勘助

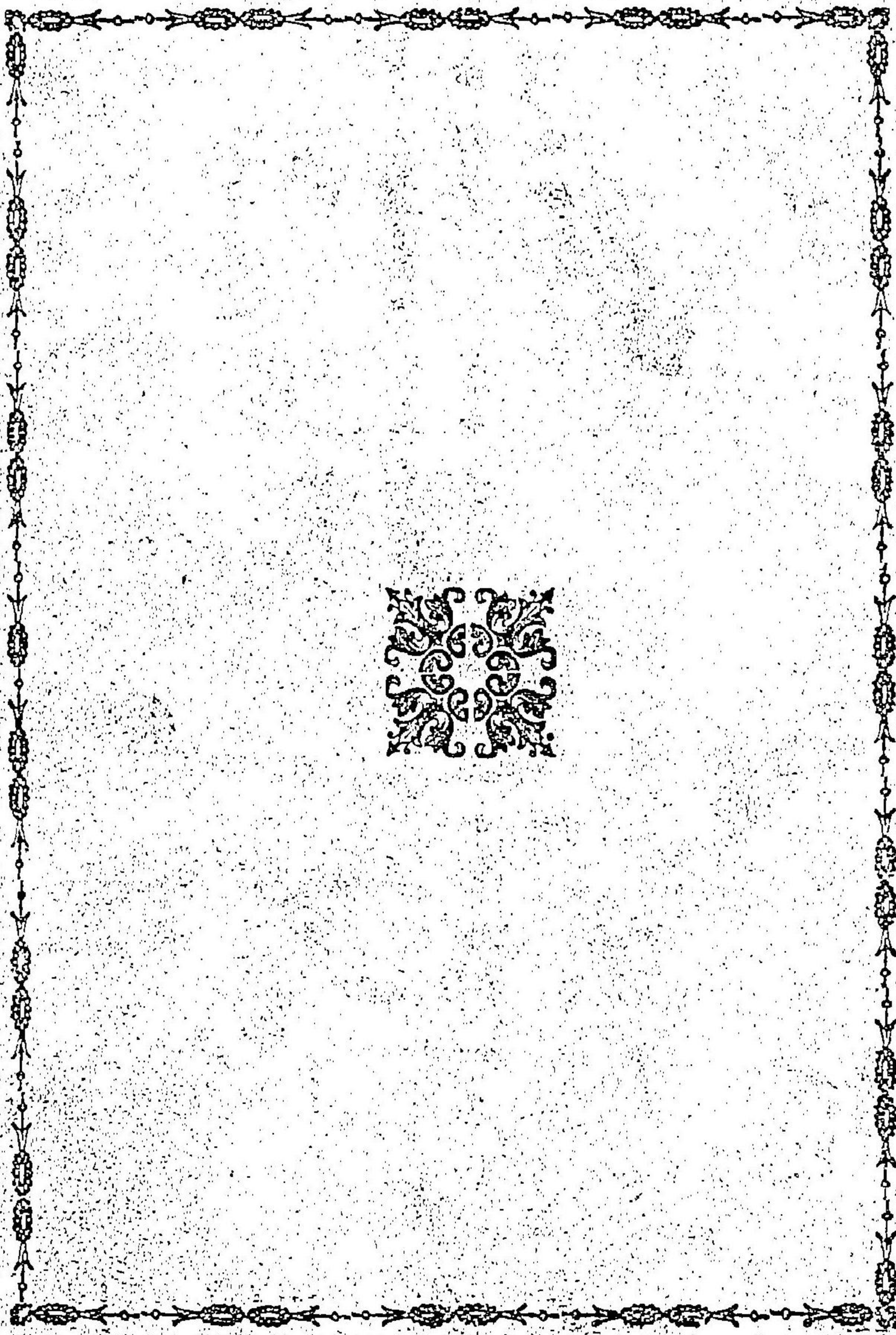
同 前川善兵衛 同 川瀬代助

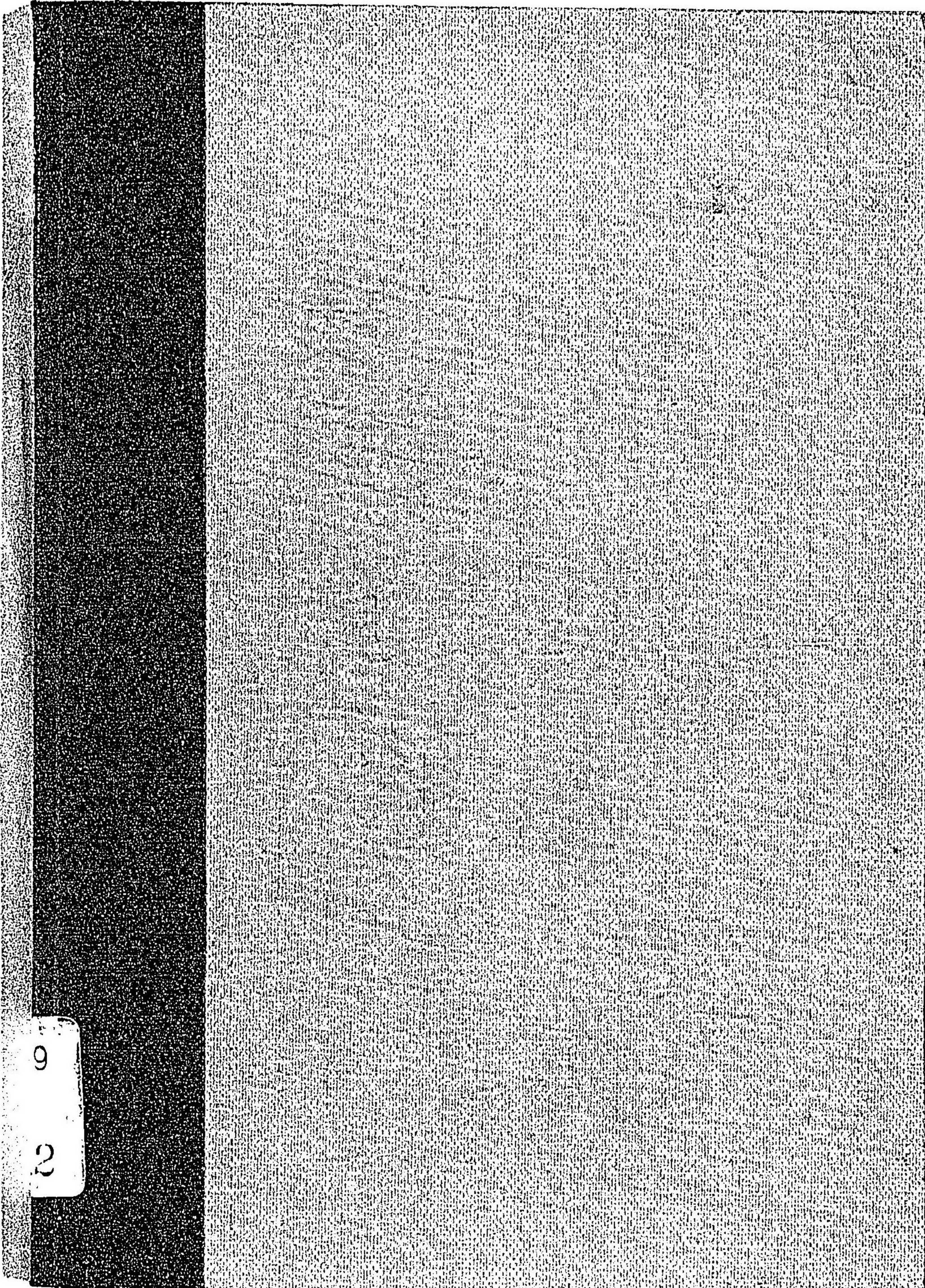
同 中野慶造 越前 岡崎佐喜助

同 眞村武助 同 森下元次郎



68x2





9
2

036627-000-7

特29-812

勸解論綱

松井 直誠/著

M13

BBS-0045



特

8